

紹介

ピーター・サルウェイ編

(南川高志監訳 佐野光宜・西村昌洋・

富井眞・南雲泰輔訳)

『ローマ帝国時代のブリテン島』

(オックスフォード ブリテン諸島の歴史)

ローマ帝国は——帝国と呼ばれる国家すべてにあてはまるのだろうか——辺境地帯の研究を通じてこそ、その統治構造や文化様式の特徴をよりよく理解することができよう。一般に辺境とは、帝国の力の源たるハードパワー(軍事力)とソフトパワー(文化力)とが、帝国外の地域との相克を通じて、その特異性を確立する場所である。もちろん、辺境におけるハードパワーとソフトパワーの形式と程度は、それぞれの帝国によって異なっているが、ではローマ帝国の辺境では、帝国地域と帝国外地域はどのような関係にあったのか。

紹介
この問いに貴重な材料を与えてくれるのが本書である。全一巻からなる『オックスフォード ブリテン諸島の歴史』の初巻

である本書は、ローマ帝国の北方辺境地帯の一部を構成したブリテン島の歴史を、ローマによる征服活動が始まった前一世紀からローマ支配が終焉を迎える五世紀まで、最新の研究成果に拠りながらさまざまな角度から分析をくわえている。本書の構成は以下の通り。序論／第一章 ブリテン島の変容——カエサル速征からボウディッカの反乱まで／第二章 新たな出発——ボウディッカの敗北から三世紀まで／第三章 古代末期のブリテン島——四世紀以降／第四章 属州ブリタニアにおける文化と社会関係／第五章 景観への影響——農耕、定住地、産業、インフラ／第六章 世界の縁——帝国最前線とその向こう側／結論。大きくまとめるならば、第一—三章が、ローマ時代ブリテン島の通史、第四—六章が、それぞれローマ支配によるブリテン島の文化変容、環境の変化、ローマと先住民との関係に焦点を絞ったテーマ史、ということができる。

初期の征服活動を通じて、ローマ帝国は現在のイングランドとウェールズに相当する地域を支配下におさめたが、スコットランドに相当する地域に居住する先住民を服

属させることはできず、そのためローマは先住民居住地域と帝国地域を分断する長城を建設し、有能な総督の指揮下に多数の軍団を配置し統治にあたらせた。ブリテン島に駐屯したローマ軍は、全帝国の軍隊の一〇パーセントに達したとも推計されている。異民族の跋扈する帝国の果て、というイメージを付与されたブリテン島は、帝国の大半が平定されたバクス・ロマナの時代になっても、帝国中心部では望み得ない軍事的名声を求め、皇帝や、蛮族を啓蒙する「帝国化の使命」を帯びた総督にとって、格好の征服対象だった。ソフトパワーの面でも、ローマの影響力は大きかった。征服初期には、道路、神殿、公衆浴場、地中海風の食料といった快適な生活や娯楽がローマ人によって導入され、ブリテン島エリート層はローマ支配末期に至ってもギリシア・ローマ的モチーフで邸宅を装飾した。しかし本書は同時に、ローマ風の生活様式や価値観がブリテン島のすべての地域・階層に均質に受容された訳ではないこと、ローマ支配以前の文化の一部では存続したこと、そして都市や要塞、ウィッタ(田園邸宅)といったローマ風のインフラが帝国

の衰退後には長く存続しなかったことを指摘して、帝国のソフトパワーの限界にも注目する。この点で、本書はバランス感覚にあふれた良書である。

監訳者の南川高志氏は著書『海のかなたのローマ帝国——古代ローマとブリテン島』（岩波書店、二〇〇三年）のなかで、近現代におけるローマ時代ブリテン島の研究が世界情勢（特に大英帝国の繁栄と衰退）との密接な関連のもとにおこなわれてきたことを指摘している。読者は本書を南川氏の著書と併読することで、近現代の研究が時代に寄り添って作り上げた言説としてのブリテン島と、最新の考古学データに基づいてバランスよく描かれたおそらくはより実態に近いであろうブリテン島とを、一望のもとにおさめることができる。本書の翻訳によって、ブリテン島は、ローマの帝国統治の虚像と実像を学ぶ格好の素材となったといえるだろう。

(A5判 四二四頁 二〇一一年五月)
慶應義塾大学出版会 税込五〇四〇円
(藤井崇 オクスフォード大学研究員・日本学術振興会)

海外特別研究員)

編集後記

『史林』九五巻二号をお届けします。今号は、論説が三本、書評が四本、紹介が一本という内容になっております。ビザンツの百科事典を手がかりにローマ帝国の宦官を検討する南雲論説、オスマン帝国支配下のビザンツ知識人のアイデンティティを検討する上垣論説、イギリス帝国の対中通商システムを法の運用の問題から検討する西山論説という、西洋史の論説三本を中心に、古代日本の紡織、信長・秀吉・家康と天皇、近世琵琶湖の水運、さらには中国革命とナショナリズムの問題を取り上げた、考古や日本史、東洋史分野の論著の書評を載せることができました。

いずれも読みごたえのある、興味深い論考がそろっております。本号が皆様のお手元に届くころには、ちょうど桜が咲き始めていることかと思えます。『史林』片手におでかけになって、桜のもとでの読書などいかがでしょうか。

春は出会いと別れの季節と申しませんが、当会の理事長を歴任されるなど、長らく当会の活動に関わってこられ、ちょうど本号

の発行日に京都大学大学院文学研究科を退職される藤井讓治先生の著作の書評を、本号に載せることができました。全くの偶然ではありますが、その巡り合わせに驚くとともに、先生の教え子といたしましては、本号が今後も研究を意欲的にすすめるであろう先生の門出を祝う花東代わりになったのではとひそかに喜んでおります。

(鍛治 宏介)

◆史学研究会ホームページ・アドレス

<http://www.shigakutenkyukai.jp/index.html>

二〇二二年三月二十五日印刷
二〇二二年三月二日発行 定価一、二〇〇円

史林 九五巻第一号(通巻第四九二号)

京都市左京区吉田本町京都大学文学部内

電話 〇七五 七五三一七八七

FAX 〇七五 七五三一七八七

発行人 史学研究會
振替京都 〇一〇七〇二一五五番
理事長 夫馬 進

印刷所 中村印刷株式会社
京都市南区上鳥羽藤田二九